

【石の俗称】

東京下町探石散歩

遠藤 祐二¹⁾・加藤 碩一²⁾

東京の街を歩いてみると、意外に(?)お寺や神社の多いことに気がつきます。護国寺や明治神宮のような壮大なものから、1万分の1の地形図からも零れ落ちそうな路地裏にひっそりと鎮座するものまで、その数はいったい幾つになるのか検討もつきません。そうして、どんな小さなお寺や神社にも必ず一つや二つの石を見ることができます。慎ましい縁石や庭石から巨大な石碑や石鳥居に至るまで、さまざまな自然石・加工石との出会いがあり、お寺や神社は石の展示場といってもいいでしょう。そこで、今回は東京の中でもとりわけ中小のお寺や神社が数多く見られる下町を歩いて、何かいわくのありそうな石を探してみることにしました。

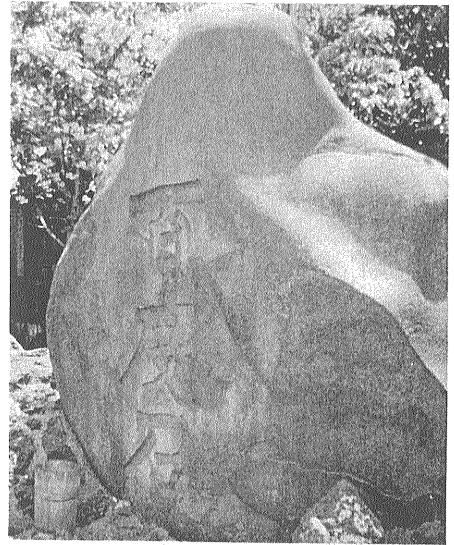


写真1 深川不動の百度石。自然石。

板石(いたいし・ばんせき)

寺社巡りをして、最も目に付く石は大小さまざまな石碑でしょう。石碑は寺社に限らず公園、学校、街角などにもお馴染みのものですが、密度の点では寺社に勝る場所はありません。記念碑、歌碑、縁起碑など由来もさまざまなら、使われている石の種類もこれまたさまざまです。形にもいろいろある中で、板状の天然石を素材とした石碑を特に板碑(いたび・ばんび)と呼び、これに用いられる石を「板石」と称します。つまり、厳密に言うと板状に加工した石碑は板碑の中には含まれないわけです。こうなるといきおい石の種類は限られ、スレート(頁岩・粘板岩)、鉄平石(安山岩)、三波石(結晶片岩)などの板状に割れやすい性質を持つ岩石が選ばれることとなります。事実、東京下町の板碑には三波川帯の緑色片岩が数多く使われています。おそらくは産地の秩父地方から荒川の水運を利用して運び込まれたものなのでしょう。もちろんスレートや鉄

平石でできた板碑も少なからず見かけられますが、これらの石の原産地は定かではありません。板石(板碑)の一例を写真3でご覧ください。

百度石(ひゃくどいし)

お百度参りというのは、神仏に願い事を叶えてもらうための民間信仰の一つです。うら若い町娘が何事かを祈願して、人影の絶えた夜のお寺の境内に素足でお百度を踏み姿は、時代劇のドラマなどでしばしば目にするところです。願いを唱えながら百往復する時の目印としたのが「百度石」ですが、ちょっと注意してみると、拝殿のすぐ横に位置するものと、拝殿からそこその距離に建つ石とがあることに気づきます。初めは単純に、前者は線香や願文などを供える場所として、後者は拝殿までの起

1) 産総研 地質標本館
2) 産総研 地球科学情報研究部門

キーワード: 東京下町、板石、百度石、力石、腰掛石、瑞光石



写真2 入谷鬼子母神の百度石。角柱。

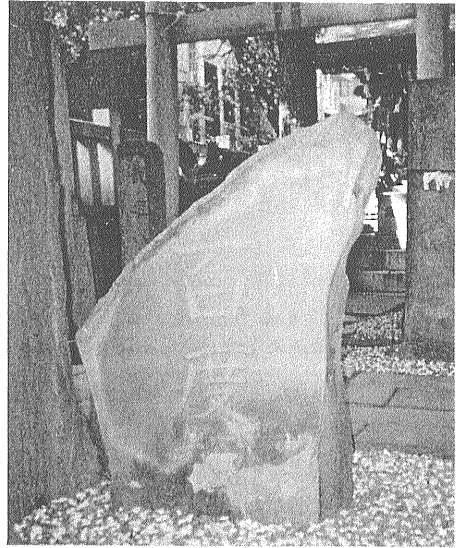


写真3 小野照崎神社の百度石。板石。

点として置かれたものかと考えていました。しかし不思議なことに、両者が対になった例は見かけたことがありません。百度石が参拝のコースを定めるものなら、起点と終点に一個ずつ置かれるはずで、そうでないということは、百度参りは必ずしも寺社の拝殿とは関係なく、百度石そのものが参拝の対象になっていたのだと考えなければなりません。年月を経る間には、拝殿や百度石が移動させられたこともあったでしょう。位置の詮索をするよりは、百度石そのものに注目した方が賢明といえそうです。

百度石はあちこちにあり、材質はもとより形もいろいろです。ここでは4種の形を紹介しておきます。

江東区深川の深川不動尊にある百度石は自然石をそのまま使っています(写真1)。高さ2mを超える巨石で、今回見た中では最大の百度石でした。おそらく安山岩かデイサイトと思われます。この手の石には時代が付いて、表面だけから岩質を判定するのはなかなか困難です。ハンマーで欠き割れば一発で分かるのですが、そんな無法は許される筈もなく、常に隔靴搔痒の感に悩まされるところです。地下鉄東西線・大江戸線、門前仲町駅。

台東区下谷にある入谷鬼子母神は7月の朝顔市が有名です。朝顔の鉢を売る店が狭い境内を溢れて言問い通り沿いにズラッと並び、浴衣姿の人並みでゴッタ返す様は華やかで壮観です。またここに



写真4 雑司ヶ谷鬼子母神の百度石。円柱。

は福禄寿も祀られており、正月には下谷七福神巡りのコースとして賑わいます。その福禄堂の前に建つ百度石は、砂岩とおぼしき高さ1mほどの角柱です(写真2)。地下鉄日比谷線、入谷駅。

同じ町内を北東へ5分ほど歩くと小野照崎神社があり、ここにも百度石が見られます。この石は高さ1mの板状で、安山岩の板状節理を利用したものです(写真3)。

いわゆる下町からは外れますが、豊島区雑司ヶ

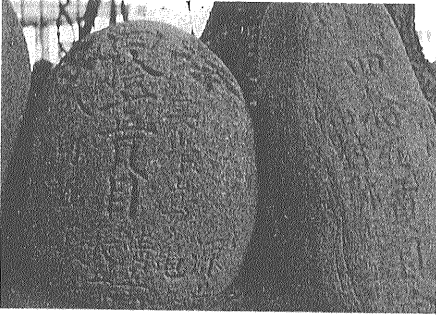


写真5 雑司ヶ谷鬼子母神の力石。左：花崗閃緑岩、
右：結晶片岩。



写真6 富岡八幡宮にある横綱の碑。

谷の鬼子母神にある百度石は形が珍しいので紹介しておきます。都電荒川線の側から本殿を臨む鳥居のすぐ右横に、円柱に磨かれた百度石が建っています(写真4)。直径20cm、高さ120cmほどの安山岩ですが、こんなに手間をかけたであろう百度石はこれまで見たことがありません。都電荒川線、鬼子母神前駅。

力石(ちからいし)

このシリーズの前々回には「力石」を取り上げました(加藤・遠藤, 2001)。その中で東京都内の力石にも触れ、赤羽の香取神社、雑司ヶ谷鬼子母神、深川の富岡八幡宮、神田明神の例を写真で紹介しましたが、少しばかり蛇足を加えておきましょう。

雑司ヶ谷鬼子母神の力石はデイサイト質のものが多いと書きました。ここには7個の力石が奉納されており、5個まではデイサイトないし安山岩ですが、花崗岩質の石が1個と三波石と思われる結晶片岩1個も含まれています(写真5)。

富岡八幡は「深川の力持」発祥の地で、力を売り物の力士とは縁が深く、境内には「横綱の碑」があることでも知られています。重さ50tに及ぶという花崗岩の一枚岩の正面に横綱力士碑と彫られ、裏には歴代横綱の名前がズラリと刻まれています(写真6)。すでに裏面は初代若乃花までで満杯になり、その後の横綱は右側に増設された石碑に移されています。こちらも前面はお兄ちゃん横綱三代目若乃花までが埋め尽くし、伯父と甥とが二つの石碑のトリを取っているのは何かの因縁でしょう

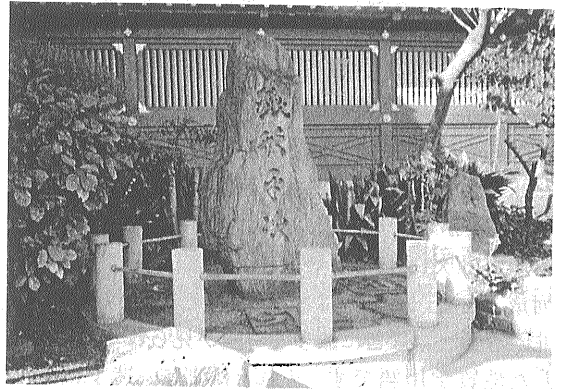


写真7 神田明神にある銭形平次の碑。

か。背面には武蔵丸の名が一人ポツンと記されており、次に名を連ねる力士を待ちかねているようです。また、参道の大鳥居の右横には大関にまつわる石碑群も建てられています。地下鉄東西線・大江戸線、門前仲町駅。

神田明神には力石の他にもいろいろ面白い石があり、「銭形平次の碑」はその最たるものでしょう。お馴染み野村胡堂作「銭形平次捕物控」の主人公の住居が神田明神下とされていたことから、昭和45年にこの地に建てられたものです。寛永通宝を擬した台座の上に緑色片岩の碑を乗せるという凝った造りになっています(写真7)。傍らに子分の八五郎の碑がつつましく添えられているのも、微笑ましい限りです。映画やテレビで平次を演じた長谷川一夫や大川橋蔵も、発起人の中に名を連ねています。地下鉄丸の内線、御茶ノ水駅。



写真8 湯島天満宮の迷子石。

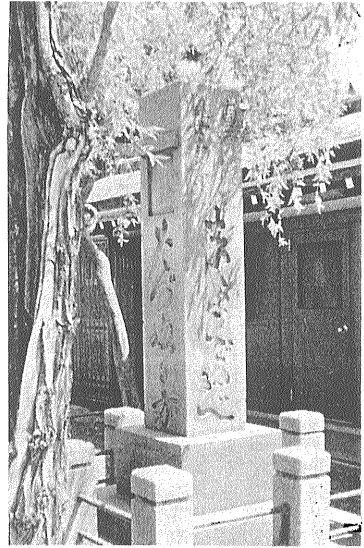


写真9 浅草寺の迷子石。

迷子石(まいごいし・まよいごいし)

氷河によって遠く運ばれ堆積した岩塊は、当然のことながら下層の岩床とは岩質も年代も異なり、かつては大いに地質ヤを悩ませました。これが「氷河成迷子石(こちらはマイゴイシと発音する)」で、北欧やカナダなどに数多くの例が見られるれっきとした地質学用語です。それとは別に、迷子に関する情報交換を目的に建てられた石碑を俗に「迷子石(この方はマヨイゴイシと呼ぶ)」と称します。「迷子するべ石」または単に「しるべ石」と呼ばれることもあります。

現代でもデパートや遊園地などでの迷子の呼び出しアナウンスはよく耳にするところですが、マスメディアに乏しかった時代、とりわけ「神隠し」とも称された子供の誘拐が横行した江戸の頃には迷子は深刻な問題でした。そこで苦心の策として設置されたのが迷子石なのです。探す方が子供の特徴などの手がかりを記した紙を迷子石の片側に供え、心当たりのある方が反対側に手持ちの情報を提供することで、探索の手懸りとするための情報交換の場所とされました。行方知れずになった我が子を探す親は、寄せられる知らせを頼みの綱として迷子石に日参したことでしょう。石碑の側面に刻まれた片や「たづぬる(尋ねる)方」、もう片方の「おしふる(教える)方」の文字を見ていると、何とはなしにジンとくるものがあります。

文京区湯島の湯島天神(天満宮)にある迷子石は、幅25cm、高さ160cmほどの頂点を緩い錐状にした角柱で、材質は安山岩と思われます(写真8)。文久二(1862)年(嘉永三(1850)年説もある)の建立とされ、石柱の正面には「奇縁氷人石」と彫ってあります。「氷人」とは「仲介をする人」の意味で、「月下氷人」は婚礼の仲人を指します。中国の晋の時代、令狐策なる人が氷の上に居り、その氷の下に居た人と語り合う夢を見ました。夢の中での話題の通り、後に彼は太守の息子の仲人を勤めることになったそうで、これが「氷人」の由来です。同様に唐の時代のある人が月夜に会った老人の予言通りの結婚をしたという故事と併せて、「月下氷人」が仲人を意味する言葉となりました。無論ここでは迷子と親とが会えるように取り持つという意味が込められているわけです。地下鉄千代田線、湯島駅。

台東区浅草の浅草寺観音堂前左手に立つ迷子石は、正面に「まよいごのしるべ」と彫られた上に「南無阿弥陀仏・観世音菩薩」の銘があります(写真9)。安政七(1860)年に新吉原の松田屋嘉兵衛がこの碑を建てた際に、安政の震災で亡くなった遊女の供養の意を込めていたからです。原碑は震災で破壊され、現存する石碑は昭和51(1976)年に再建されたものですが、死者の供養のために建てられた迷子石もあったわけです。この安政江戸



写真10 大久寺にある日蓮腰掛石。



写真11 浄光寺にある將軍腰掛石。

地震は安政二(1855)年に起こった直下型地震で、マグニチュードは6.9と推定されています。直径20kmほどの下町地域に被害が集中したのが特徴で、町方だけで倒壊家屋1万4千軒を数え、1万人前後にも及ぶ死者が出た大被害地震でした。現在の迷子石は1辺約40cm、高さ約2mの四角柱で、石質は花崗斑岩です。細粒の花崗岩質基地(石英・アルカリ長石・黒雲母)の中に、最大2cmにも達する斜長石の斑晶が散っています。地下鉄銀座線・浅草線・東武伊勢崎線、浅草駅。

ここまでの石はいくつかの場所で見ることができましたが、以下に紹介するのはそれぞれの寺社に固有の石のあれこれです。

日蓮腰掛石(にちれんこしかけいし)

いわゆる「腰掛石」は神々や高僧・貴人など、古の歴史上または架空の有名人が腰掛けたと伝えられる石で、全国各地に様々な人物にまつわる腰掛石があります。さらには猿や竜などの現実・架空の動物が腰掛けたとされる石まであり、真偽のほどは眉唾なのが大半とっていいでしょう。興味のある方は「石の俗称辞典」(加藤・遠藤, 1999)をご覧ください。

北区田端の大久寺に奉られているのもその一つで、「日蓮大士おしかけ石」と彫られた石碑を従え、三本の石柱で支えられた四阿(あずまや)風の

囲いの中に鎮座しています(写真10)。石碑にはまた「伊豆蓮々省寺より将来」とも記されており、元々は伊豆のお寺にあったものを移したことが示されています。暗灰色のおそらくは安山岩とおぼしき径約30cm、高さ約60cmのほぼ円筒形の石で、どう置いたとしても、あまり座り心地がよさそうには見えません。JR山手線・京浜東北線、田端駅。

將軍腰掛石(しょうぐんこしかけいし)

荒川区西日暮里の浄光寺には「三代將軍御腰掛石」があります。寺の入り口には徳川八代將軍吉宗が狩猟の際の休息所にしたとの看板があるので、てっきり吉宗の座った石があるものと思っていたところ、あにはからんや石の方は三代家光に因むものとあって、一瞬とまどってしまいました。実は先に触れた「石の俗称辞典」の中でも「吉宗が腰掛けた」と記述していますので、ここで訂正させていただきます。初代家康に次いで家光をも尊崇したといわれる吉宗は、この石に惹かれて足繁くここ浄光寺を訪れたのかも知れません。石は庫裏と思しき建物の裏手、JRの線路群を見下ろす崖の上に置かれています。寺の正門からは墓地を抜けて回り込まねばならず、案内板などもないので、境内をちよいと覗いただけでは何処にあるのか分かりません。やや楕円形(100×80cm)の播鉢を伏せたような形の石で、高さは25cmほど、中央に甌穴とおぼしき直径20cmの丸い穴の空いているのが何やら

いわくあり気です(写真11)。茶褐色で表面には綺麗な縞模様が走り、この石が縞状チャートであることを物語っています。JR山手線・京浜東北線・地下鉄千代田線、西日暮里駅。

瑞光石(ずいこうせき)

荒川区南千住の素さの雄神社(通称天王社)は、日光街道(国道4号線)が都心から隅田川を北へ渡る千住大橋の南詰めにあります。この天王社の祭神である素さの雄大神と飛鳥大神が一条の光と共にこの地に降臨して小塚を造り、その塚の中に生じた奇石とされるのが「瑞光石」です。地中に深く根を張り、千住大橋架橋の際に橋杭の打ち込みを妨げたと伝えられています。天王社の境内にある瑞光石の塚は今では周りを石垣で囲まれ、石の実体を伺い知ることはできません(写真12)。瑞光は最近までこの付近の町名でしたが、現在は瑞光小学校がその名残を留めるだけになってしまいました。

また、小塚の方は江戸時代のこの付近一帯の呼び名、小塚原(こづかばら)の語源とされています。小塚原は大田区鈴ヶ森と並んで、江戸の二大処刑場(板橋も加えて三大処刑場とすることもあ)として歴史に残りました。天王社の前から南千住駅の方へ向かう商店街をコツ通り(江戸期の奥州街道にあたる)と称しますが、小塚(コツカ)が訛ったものとも、道路拡幅の際に掘り出された大量の処刑人の骨(コツ)に由来するともいわれています。いずれにしても、昔は浅草と千住の宿を結ぶ野中の寂しい一本道で、20万人にも及ぶ罪人が埋められていたこの地は鬼気迫る所であったことでしょう。寛文七(1667)年、本所回向院の分院(当初は常行堂、後に小塚原回向院)が建てられ、刑死者らの供養を行うようになりました。南千住駅にほど近い現在の回向院には、安政の大獄で処刑された橋本佐内や吉田松陰ら、多くの幕末期の著名人の墓が置かれています。

陰惨な雰囲気満ちた小塚原の名誉のために面白い(?)話題を一つ。明和八(1771)年、杉田玄白・中川淳庵・前野良沢らの蘭学者がここ小塚原

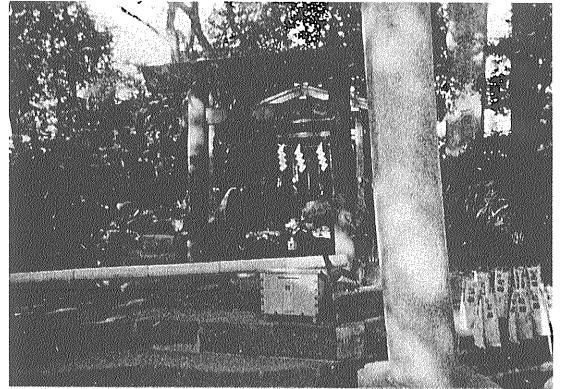


写真12 素さの雄神社にある瑞光石。

で刑死者の腑分け(解剖)に立会い、蘭書の記述の正確さに驚嘆したくだりは玄白著「蘭学事始め」でよく知られているところです。彼らは後に「解体新書」を翻訳して、日本医学史上に大きな功績を残しました。これを記念する観臓記念碑が回向院に飾られています。

さらに余談。松尾芭蕉が「奥の細道」の旅への第一歩を印したのが千住の地です。深川を舟で出た芭蕉は、ここから陸路はるか奥州へと旅立ちました。瑞光石のある天王社には「行く春や鳥啼き魚の目は泪」の句碑があります。JR常磐線・地下鉄日比谷線、南千住駅。

今回は東京下町の北半分を観て歩きました。肝心の石の話より余談の方が多くなってしまった感がありますが、今なお色濃く残る下町の雰囲気は歴史、風物をも偲ばせる結果になったのだと思います。見落としも多いことでしょう。「あそこにこんな石もあるよ」といったお報せをお寄せいただければ幸いです。

文 献

- 加藤碩一・遠藤祐二(1999): 石の俗称辞典, 愛智出版, 312p.
加藤碩一・遠藤祐二(2001): カ石. 地質ニュース, no.561, 63-68.

ENDO Yuji・KATO Hirokazu (2001): Stone watching walk in Tokyo traditional area.

<受付: 2001年9月14日>